

Title	アントニオ・カバニーリエスに見るスペイン・バレンシア地方イメージの形成
Sub Title	La imagen de Valencia que formaba Antonio Cavanilles
Author	前田, 伸人(Maeda, Nobuhito)
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2007
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. 言語・文化・コミュニケーション (Language, culture and communication). No.39 (2007.), p.71- 86
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10032394-20071220-0071

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

アントニオ・カバニーリエスに見る スペイン・バレンシア地方イメージの形成

前 田 伸 人

1. はじめに

バレンシア像とテーマ設定

スペインの東部地中海には、バルセロナを州都とするカタルーニャ自治州とその南にバレンシア自治州とがある。このバレンシアは文化的にはカタルーニャと共通する側面が多い。話されている言語といえば、共通語であるカスティーリャ語と並び広い意味でのカタルーニャ語が話されている。

歴史的にこの地は常に外部世界との接触に晒されてきた。例えば、先ローマ期におけるフェニキア人の足跡の証拠である婦人像は、火祭りでも有名なエルチェで発掘されている。イベリア半島がイスラム下にあった時代（711年から1492年）にはアラブの灌漑技術が導入されて、ウエルタと呼ばれる見事な果樹園が広がった。イスラム教徒を追い出してキリスト教徒の下に半島を奪回するという、いわゆるレコンキスタ終了（1492年）後も、同地にはモリスコつまりキリスト教徒に改宗した元イスラム教徒が残留し、それまでの農業技術を継承した。だが、当時のスペインハブスブルク家にとっては、モリスコと北アフリカ（とりわけアルジェ）のイスラム勢力とが連携するのではないかという悪夢に悩まされた。事実イスラムの“海賊”にも同地がしばしば襲撃を受けている。現在でもアフリカからの難民はカナリア諸島に次いでこのバレンシアに漂着しており、北アフリカとバレンシアの近さが実感させられる。結局17世紀の初頭にモリスコたちは追放刑となる。言語的には同じカタルーニャが“シャルルマーニュの息子”を任じてアラゴンとともに連合王国を組んでいたのに比べると、同じ連合王国下にあったとはいえ、イスラムの影響が強かった地域であったといえよう。近現代のバレンシアは作家ブラスコ・イバニェスが描いている。情熱のほとばしる闘牛士の運命の変転を描いた『血と砂』、海洋国家を髣髴さ

せるかのように海に乗り出す主人公を描いた『我らの海』、そして米作地帯を舞台にした『葦と泥』がある。

スペインの歴史は各州が連携を保ちながらも異なった歩みを持っている。その一つであるバレンシアの地域特性を認識し、叙述した嚆矢はだれであろうか。それは18世紀後半に、バレンシア王国の自然誌を書いたアントニオ・カバニーリエスであろう。本稿では植物学者として知られるこの人物に焦点を当て、18世紀のスペインの状況と関連づけつつ、彼の著作に現れるバレンシア像がいかなるものかを探求することを目的とする。

予備的考察：18世紀と19世紀の地誌記述の違い

今、ある限定された地域の人文・自然現象を統一的に扱い、その地域的特性を明らかにした著作を地誌と呼んでおこう。そうした地誌が18世紀という啓蒙時代から19世紀というロマン主義の時代に向けてどのように移行したかを考察しておこう。

19世紀に書かれた地誌は、単に行程を詳細に記述しただけでなく、探求地における動植物相を視覚に訴えるべく図化したことに大きな特徴がある。その際、新種の動植物を詳細に記載するために独立して個別の図像を描いただけではなく、とりわけ植物においては、その周辺を含めた、一種の複合的な風景ないしは景観を描くようになった。1799年から1804年に南北アメリカ大陸を探検したドイツ人、アレクサンダー・フォン・フンボルトは、帰国後ドイツ語で『自然の景観』を出版しているが、この中で各々の地域を植物景観で代表させて叙述し、併せてその絵図を掲載している。彼は以後1820年代末までパリに滞在して30巻に及ぶアメリカ探検記を纏めるが、これにも多くの図表が含まれ、地上に展開する複雑な事象の分布や相関関係や因果関係の理解を容易なものにした。

それではどんな条件の下で19世紀の地誌は成立したのだろうか。先ず人文現象と自然現象の相互関係が捉えられる必要がある。18世紀後半に登場したモンテスキューの『法の精神』やヘルダーに見るよう、例えば気候が自然だけではなく国民の気質や言語、制度の形成にまで関与するといった気候決定論のような自然決定論が前提となる。

第二に個々の自然科学の発展を必要とし、そこには時間性あるいは歴史性といった観念を含んでいなければならない。自然誌、つまり動物・植物・鉱物の三界の記載を任務とした学問の中で鉱物はその性格上地層を対象にしており、俄然そこから地層の時間的形成だけでなく、そこに付随する生物の興亡にも絶滅や変異があったのではないかという考え方を生み出している。

第三に、統一的な基準があった上で、各地域の上の比較が行なわれていなければならない

い。度量衡の統一・換算はもちろん、事象の統一モデルがある。当時の記述には、“スペインの尺度ではいくら、フランスの尺度に換算するといくら”といった記述が散見される。後者は地質学における地層の呼称に共通性があることに見られる。共通性を作業仮設としながら、地質学者は世界各地で探求を進めたのだった。

第四に、多様性への興味とシステム論的な考え方の融合であろう。18世紀の啓蒙主義は理性を重視する余り、画一的な人間像を以って良しとし、その基準に合わない場合を迷信として切り捨てる場合が多かった。その意味でロマン主義は啓蒙主義に対する反逆であり、人間の多様化を容認する考え方に傾いていた。一方で、ヨーロッパ世界における中世への憧れを隠さず、他方、異国世界に対する幅広い関心が旺盛である。英国のロマン主義作家ロバート・サウジーは何も『ネルソン提督』だけが主著書ではなく、むしろ大部の『ブラジル史』にこそ本領を発揮したと言える。システム論的な発想には、一方で全体は各部分の総和で以上であるとする有機体論的な考え方が必要だが、他方で各部分が分担することで全体を作り上げるとする考えが必要である。とりわけ後者の面では18世紀後半におけるケネーの『経済表』に典型的である。事実この書の中では経済的な動きがあたかも同一時間の中で閉じたシステムを形成しているかのように図化されている。ただし、絵画技術・印刷技術の向上を抜きにしては図化も人々には訴えない。

先行研究

さて、上のような予備考察をした後で、我々が扱うアントニオ・カバニーリエスがどのように研究されてきたかを簡単に見ていこう。1785年ファン・センペレ・イ・グアリノスが啓蒙的な君主であるカルロス三世の御世を称えて、その下で活躍した最高の文章家などに関する一種人名辞典とも言うべき著作を著している。重臣であるカンボマネスやもちろん、バルセロナの海事史やカスティーリャの法制史に詳しいイグナシオ・アッソといった人物はもちろんだが、学制改革や愛国協会など関連施設までもが項目として挙がっているほどだ。ここにカバニーリエスの項目もある [8. pp. 166-172]。残念ながら、1785年発行なので、百科全書の記述に対する抗議文書の提出と植物学の著作を出版した記事に留まっている。以後、植物学者としての側面が大きく取り上げられる。1830年（1906年復刊）にはホセ・ピスクエタにより、1917年にはレイェス・プロスペルにより、カバニーリエスに対する研究が進む。1946年には、ルイス・バルデス・カバニーリエスと、とりわけエンリケ・アルバレス・ロベスにより、彼の著作の研究が深められた。なお後者は、18世紀末にアルゼンチンやラプラタを探検したフェリックス・アサラをダーウィンの先

駆者として位置付けた研究者でもある。それに対し、彼の地質学的な側面を明らかにしたのが、マテウ・ベリエスである（1980, 1983年）。

以後、80年代と90年代におけるスペインの科学史界では、啓蒙主義研究と相俟って第一次史料を広く用いた科学の制度化研究が進んだ。この間にもブイグ・サンベルやホセ・ルイス・ベセットによる研究成果（1994年）が発表され、96年にはバレンシア研究・教育所によりカバニーリエスの研究シンポジウムが開催され、以後もカバニーリエスの書簡の研究が進んだ。近年発行された金字塔というべきはアントニオ・ゴンサレス・ブエノによる『アントニオ・ホセ・カバニーリエス（1745-1804）：科学に対する熱情』である。一次史料を広く用いて、植物学者としての側面からカバニーリエスの伝記を描いている。しかもそこは個人史に留まらず、啓蒙主義の中で一枚岩だと思われた植物学近代化の試みの中に、実は大きな対立があった記述こそが圧巻であろう。何もそれは反動派對進歩派という対立よりは、依拠したヨーロッパの学派の対立をむしろ反映していたのである。

テーマ再設定と構成

先行研究を見る限りでは、その多くは植物学者としての側面を際立たせている。そこで本稿ではその側面を重視しながらも地質学的側面をも取り入れて、18世紀から19世紀への移行期に地誌を描いた人物としてカバニーリエスを位置付け、そのバレンシア記述が地誌記述としてどのような特徴をもち、そしてどのような位置付けができるのかを追ってみたい。主たる素材は、『バレンシア王国の自然誌、地理、農業と産物に関する観察録』（第一巻1795年、第二巻1797年）と『バレンシア王国における米作と公衆に与えるその影響に関する観察録』（1797年）である。最初の二巻本がバレンシア視察を纏めた書であり、後者はバレンシア地方の米作地域で生じた米作維持か否かをめぐる問題を論じたものである。以下、第二章で18世紀スペイン科学の制度化に関して、政治的変動、旧王国のルサンティマン、ヨーロッパ産科学の移植、科学的データを収集するため探検や旅行について触れる。第三章では、いよいよ主人公であるカバニーリエスが登場する。その生涯に就いて簡単に述べ、併せてフランスに対する抗議声明の意味にも触れる。そうしてバレンシア旅行を通じて彼の打ち出したバレンシア像を示す。最終章で彼のもたらした成果を再考して纏めとする。

2. 18世紀スペイン科学の制度化

ブルボン朝の成立

ハブスブルク朝はカルロス二世に後継がなく、その死後は遺書に従ってルイ14世の孫アンジュー公フィリップがスペイン王フェリペ5世として即位した。かくてブルボン朝が創始されたのである。フランスの勢力拡大を嫌った各国の介入で、スペイン継承戦争が勃発した。当初は劣勢であったが後に勢いを盛り返してフェリペが勝利し、1713年に締結されたユトレヒト条約の結果、その即位がヨーロッパ世界内でも承認された。それはある意味甚大であった。

第一に、ヨーロッパの所領を失った（のちにイタリア領を奪回するが）結果、王国がアメリカ大陸に依存する度合いはより大きくなり、同大陸が探検開発の対象となる。第二に、フランスのブルボン朝に倣って中央集権制が強化される。その中には諮問会議に諮る一種の集団指導体制を改め、国王直属の複数の省が設置されたことに加え、スペイン王国の主要な構成分子であったアラゴン連合王国の地位失墜である。ハブスブルク朝ではカスティーリャ王国とアラゴン王国とがそれぞれ独自の法や習慣、度量衡を持っていたのだが、18世紀からは前者による中央集権がスペイン王国全体に拡張されたのだ。従って、この世紀を通じて旧アラゴン王国のルサンティマンが残った [6, pp. 292-7]。だが、同時に他の旧王国の立場が同等であるため、機会均等になった面がある。横並びになったところで漸くそれぞれの旧王国でリージョナリズムが生まれることになろう。そして第三に、諸学問の制度化が行なわれ、アカデミーなどの機関が誕生する。とりわけ、ヨーロッパ産の新しい科学はこうした機関を拠点に推進される。第四には、他のヨーロッパ諸国と同じく、啓蒙主義の影響に置かれることになる。とりわけカルロス三世の統治する時代に典型的である。

啓蒙主義

それでは今挙げた四つの影響について敷衍しておきたい。まずは啓蒙主義についてである。ここでは何よりも、理性を重視する態度を指し、それに適合しないことは迷信として退ける態度を意味する。それと並んで、認識の源泉を感覚に求める感覚主義が流行を見た。とりわけ皇太子の守り役に哲学者のコンディヤックがいたことが大きい。彼の教説をラモン・カンボスがさらに広めることになる。次に、フランスのド・ラメトリーやドルバック

に見るような無神論的で機械的な唯物論ではなく、むしろキリスト教を使徒の時代に戻すことを旗印にした一種の政教分離を指すと言える。スペインの場合、すでに15世紀の終わりからローマ教皇庁とは一線を画すパトロナートリアルという考え方があった。聖職者の任命権や俸禄支給を次第に国家が掌握し、教会を国家の支配下に置いて国教化し、実質的に教育・道徳機関に変える考え方であった。これは17世紀にフランスに浸透するや、ボシュエらが唱導するガリカニズムになる。面白いことに18世紀後期のスペインではこれが再輸入されレガリスモとなるのである。

三つ目としては、キリスト教の後退に伴う現世利益の重視である。18世紀の文献には、実に“utilidad”（効用）なる言葉が頻出するのに遭遇する。18世紀末期になるとこの効用の増進を一層進める考え方に傾く。それが自由主義である。個々人の能力の開花を阻害する要因を除去することを強調していくのである。それは例えば、ガスパール・メルチョール・デ・ホベリャノスの手になる『農業法に関する報告書』に典型的である。〈この題材（＝農業問題）について考えを巡らせるとすぐに、次のことに気づかされるだろう。すなわち、まず、農業はいつでも完璧に向かう性向があること。次にこの傾向を促すことによつてのみ、諸法律は農業に有利に働くことができること。第三にこの恩恵は農業に刺激を与えるよりはその進歩を遅らせる阻害要因を取り除くことにあることだ。言い換えれば、農業に関する処方唯一の目的は、農業者の行動を妨害したり遅滞させたりするあらゆる妨害を分離することで、彼らの利益を守ることであるべきだ〉 [2. p. 242]。牧畜を中心とする従来のカスティーリャ農業のやり方を改めて個人農中心の穀類農業に転換し、メスタという牧畜組合の特権を殺ぐべし、というのがこの報告書の核心である。そして教会領や自治体の解体・売却が18世紀末から19世紀半ばまで続いた。それにまして、阻害要因を除くと言う考えがドクマと化し、自由主義が19世紀に吹き荒れることになる。

中央集権制による旧アラゴン王国のルサンティマン

アラゴン王国は従来の特権を喪失した。有力貴族でありさえすれば特権が保障されるわけではなくなった。おまけに、ブルボン朝は人材の登用を従来の上級貴族よりは各地方の中下級貴族から広く登用を行なった。後者は多くの場合、大学の中でも学寮出身者ではなく規則からして長いケープの着用を義務付けられたのでマンテイスタと呼ばれた [6. p. 292]。カンボマネスやモニーニョなどの有力官僚はこの出身者である。かくてアラゴン出身の不满分子は、一種徒党を組むことになりアラゴン派と称された。その中心人物はアランドラ伯である。

ただし、アラゴン出身者のすべてが反動に組したわけではない。むしろアランダ伯もそうだが、アラゴン王国の歴史や伝統を辿り直し、併せてスペインとは何かを追求する動きも出てくるのである。ここには鋭い歴史観の練磨が見られると言ってよい。その代表的人物がマヤンス・イ・シスカール（1699-1781）である。カタルーニャの血を引くバレンシアの生まれである。大学卒業後バレンシア大学で法律を教える傍ら、言語学や歴史や文学に関する著作を書いている。サーベドラファハルドに対する頌辞がその例である。1733年から6年間王立図書館に勤務した。言語アカデミー入会を示されるが拒絶する。この間アントニオ・アグスティン、ネブリハ、アリアス・モンタノらの著作を再編集する一方、『スペイン語の起源』（1737年）、『ミゲル・デ・セルバンテスの生涯』（1737年）を著述した。空席になったインディアス史官の職を希望するも得られず、かくて官を辞しバレンシアに戻り著述に励んだ。なお、のちにインディアス史官となるファン・パウティスタ・ムニョスもバレンシアの生まれである。こちらはスペイン領であったインディアス史の書き換えを図ろうとしたのだった。

歴史的視点を重視したのは何もアラゴン派に限定されない。出身地がアストゥリアスで大学もマンティスタであったホベリャノスも同様な試みを提出している。『文学の研究を科学の研究と結びつける必要性に関する発言』（1794年）はその一例であろう。

諸学問の制度化

フランスのブルボン朝に倣い、国立図書館（1711年）、スペイン言語アカデミー（1713年）、歴史アカデミー（1735年）が設立された。さらに、ヨーロッパ産の新しい自然科学の拠点が設けられた。18世紀のスペインは本国を除き、ヨーロッパ領を失っていたから、アメリカ領が王国の生命線であったから、大西洋の死守こそ急務であった。そこで新しい測地学や地図学や地理学が、王室地理官にはもちろんカディスに設置した海軍士官学校やバルセロナに設置した陸軍工兵技師学校に導入された。

自然誌の三界のうち動物と鉱物の採集と研究については、1771年王立標本館が設けられた [7, p.313]。三界の残り植物の収集、研究、育種のために1755年王立植物園が建設された [7, p.247]。この王立植物園はプラド美術館の南にある植物園である。しかし、この植物園では、必ずしも分類法が一つにならなかった。リンネの分類法が重視されながらもフランス流派も重視された。

スペイン王国の経済の大きな要素は16世紀以来、新大陸産の銀だった。南米ペルー副王領では、ワンカベリカの水銀を用いてポトシ銀山から、中米メキシコ副王領では、スベ

インのアルマデン鉱山からの水銀を用いてグアナフアト銀山から銀を取り出していた。銀鉱山の生産体制を近代化し、生産量を上げることが急務であった。そこで、ドイツ東部ザクセン王国のフライベルク鉱山学校に倣って、アルマデンやメキシコシティーに鉱山学校が1792年開学した [7. p. 233]。こうした鉱山学校では化学との関連で言えば、スウェーデン発のフロギストン説——焼結により鉱石の目方が軽くなることに発している——とラヴォワジエ説——鉱石の目方が重くなることで酸化に注目——とがある時期拮抗していたこともあると思われる。

探検隊の派遣

ドイツ人探検家でスペイン政府の許可を得て南北アメリカ大陸探検（1799年-1804年）を敢行したアレクサンダー・フォン・フンボルトは、18世紀にアメリカ大陸に数々の科学的探検隊を派遣したスペインを激賞していた。事実、1735年の西仏合同探検隊の探検に始まり、1805年のデュペまで約四十回の探検が実施されている。[5. pp. 66-69] その中にはこの1735年のように、地球楕円体が東西に長い楕円体であることを実証した観測もあれば、1754年リンネの弟子レーフリングが参加してオリノコ川魚類調査を行なうとともに、ギアナを巡るスペイン・ポルトガル国境線確定を行なった探検隊もある。以後も77年のルイス・パボンによるペルー副王領の植物探検、1789年のマラスピナによる太平洋探検がある。

しかし、アメリカ領だけではなく、イベリア半島内の探検旅行もあった。アントニオ・ポンスはことのほか遺跡や美術を求めてスペイン各地を回っている。その著作は1772年から死後の94年まで刊行されている。また、アイルランド系のギリェルモ・ボールズは、アルマデン鉱山の調査と自然誌の調査を進めた。本稿で扱うカバニーリエスもこの探検旅行の延長に位置付けられるが、ホベリャノスのアストゥリアス旅行と同じく、一時的な左遷と見なす向きもある。地籍調査であるカタストロや人口並びに産物を調査したセンソがドイツ流の官房学に基づいて、徴税目的かさもなければ人力すなわち国力を算定するための基準であったのに比して、以上のような調査旅行は自然誌と歴史が結びつき、次第に地誌を準備する下地となったと言える。

3. バレンシア旅行のカバニーリエス

カバニーリエスの生涯

1745年バレンシアで生まれる。バレンシア大学やガンディア大学で哲学や神学を修める。バレンシア大学で大きな影響を受けたのが、ビセンテ・ブラスコ・ガルシア(1735-1813)との出会いであった。この教授からハンセニスタ(スペイン流のジャンセニスト)教育を受けただけでなく、新しい物理学教育を受けた。トスカよりも遥かに革新的なニュートンを学ぶのである。この新しい物理学の恩恵に浴するのには、カバニーリエスの終生の友人で言えば、ファン・パウティスタ・ムニョス、マヌエル・ロセル、ホアキン・マスがいる。彼はバレンシア大学に職を求めようとするも果たせなかった[4-2, pp. 70-71]。

カバニーリエスとその仲間そして彼らの師匠は社会的に影響をもつフランシスコ・ペレス・バイエルと交遊があった。そのため、ペレス・バイエルが親王の教育係に就任し教育機関とりわけ大学の改革を手がけるのに伴い、各人もしかるべき職を得ている。ブラスコは1768年からはフランシスコ・ハビエル親王の教育係に、ファン・パウティスタ・ムニョスは1770年から王室付主任地理学者に任命されている。またカバニーリエスは、1770年からテオドミーロ・カロ・デ・ブリオネスの子息たちの教育係となった。1774年ブリオネスが死ぬと、上記のグループの手引きで、ムルシアにあるサンフルヘンシオ大学で二年間論理学を講じた[4-2, pp. 70-72]。

大学を辞し、マドリードに向かうと嘗ての師匠ビセンテ・ブラスコにより推挙を得、親王宅で教育係兼司祭を勤めることになる。親王一家に伴ってパリに赴いた。1778年からフランス革命勃発までの89年はとりわけ植物学などの科学を自家薬籠のものとした重要な時期である。シゴール・ドゥ・ラ・フォン物理学実験室ばかりか1783年には植物学者のアンドレ・トゥアンの指導の下、王立植物園に出入りした。のちには同じくアントワヌ・ローラン・ドゥ・ジュシューや動物学者のラマルクに接触した[4-2, p. 72]。

ここで1783年から84年にかけて波乱が生じた。その頃フランスでは百科全書の続編とも言うべき、『方法論に関する百科全書』がパンククックにより編集されつつあった[4-2, p. 76]。その巻の一つ『近代地理学第一巻』に収録された、“スペイン”の項目がスペインへの中傷に満ち満ちていたからだ。執筆者はニコラ・マッソン・ドゥ・モヴィリエだった。《今日デンマーク、ギリシア、ロシア、他ならぬポーランド、ドイツ、イタリア、

イギリス、そしてフランスといった国民はすべて、敵であったり、友人であったり、好敵手であったりするが、すべて科学と芸術の進歩には高潔な精神で競い合っている。各民族はその他の国民と分かち合わねばならない征服について熟考してきたし、今日まで役に立つ発見をしてきた。そのおかげで人類はその恩恵に浴している。しかし、スペインに負うものはあるだろうか。二世紀前から、四世紀前から、はたまた六世紀前から、ヨーロッパのためにスペインは何をしてきたか」 [3. pp. 822-823] がカバニーリエスを大いに刺激した。フロリダブランカ伯から後援を受けるとともに、書簡を通じてホセ・ビエラ、ファン・パウティスタ・ムニョス、ファン・アンドレスから情報提供を受け、1784年6月に反論を印刷した小冊子『新百科全書のスペインの項目に関するカバニーリエス神父の所見』を公にした。この反論文を巡ってこれまではどちらかと言うと伝統的なスペインの擁護と考えられがちであった。だがそうではなく、ブルボン朝の登場でスペインは物質的にも文化的にも他のヨーロッパに伍していると主張しており、啓蒙主義者としての本領を発揮しているのだとする向きが多い [4-2. pp. 78-79]。

85年にはシダルケア属に関する論考を、86年にはゼニアオイ属の研究を、87年にはフヨウ属を公刊した。中でも力を入れたのは単体雄蕊種の研究で1787年に出版した。ウブサラを始め各地の会員として承認されてパリで植物学をさらに深めようとした矢先、大革命が発生し、本国に帰還せざるを得なかった [4-2. pp. 80-84]。

しかし、彼はゴメス・オルテガの妨害工作でマドリード王立植物園に職を得ることができなかった。フロリダブランカが仲立ち王立植物園で栽培されている植物の写生はかろうじて許された。ゴメス・オルテガ側が嫌うのも、彼自身カスティーリャのトレド出身でしかも叔父はリンネと交遊のあった人物である [4-2. pp. 23-25]。我こそは自然分類を旨とするヨーロッパ有数の植物学者であるという自負が強かったに違いない。自然分類を余り認めなかったカバニーリエスをまともだと思わなかったのだろう。ともあれ1791年から1801年にかけて『スペインで自生するあるいは庭園で栽培される植物の図像と解説』6巻本を完成した。

スペインの自然誌を調査すると言う口実で彼に対し、半島各地の調査が命じられた。彼はこの機会を利用して生国であるバレンシアの調査を進めたのだった。1792年から翌年にかけて数度探査を行なっている。

ウルキーホが国務総理になったのを機会に、カバニーリエスはクリスティアン・ヘルゲン、ルイ・プルスト、ドミンゴ・ガルシア・フェルナンデスらの協力を得て『自然誌紀要』の編集を始めた (1799年から1804年) [4-2. p. 102]。他のヨーロッパ諸国に伍した

自然誌研究を進めるためだった。1801年に漸くゴメス・オルテガが引退し、カバニーリエスは王立植物園の指導者となりその機構改革を開始したもののやがて病魔が彼を襲った。

バレンシア王国の博物誌に関する問題

カバニーリエスは1792年に4回、翌年にも同じくバレンシア地方を視察している。この成果が『バレンシア王国の自然誌、地理、農業と産物に関する観察録』（第一巻1795年、第二巻1797年）に結実した。18世紀も末になると重要なのは、景観形成に伴う地質学的あるいは地形学的な考察である。彼はザクセン王国フライベルク鉱山学校の総帥であるヴェルナーの水成説に拠っている。それをどのように展開しているか、一瞥していこう。

バレンシア地方は方や東部に海岸線と持つとともに、内陸には深く刻まれた山地が見られる。そこでカバニーリエスは山脈地形が形成された原因の一つとしていわゆる浸食を重視している。同時に浸食により運ばれた土砂が海の中で堆積することをも述べている。

《水は土地を柔らかくして奪っていき、洞窟や穴を形成し、このようにして陥没を準備し、少なからず山々を完膚なきまでに破壊するのだ。山々から平原にもたらされてきた土壌の量は計り知れないし、水が海に運んだ土壌はさらに計り知れない。もしこの土壌が波により和らげられたあとで穏やかな場所に達したら、そこで自らの重さにより沈んでいき、単独であるいは他の物質と混ざり合って水平層となったことだろう。そして新たな堆積物を加えて増えていった地層は、深みを埋めていったことだろう。その上、貝やイシサング、水の中で生き死にする小動物たちの巣のような他のものが上記の層の中にあり、地層を形成していけば、今日海底の外で我々が見かけるのに大変よく似た、海底の新たな山となったことだろう》 [1-2, p. 140]。

アラス・デル・マエストラで彼は礫白状の丘を見て、《ある山の頂上はほとんど地平と平行であり、山を構成している地層は同様に根元まで平行である》と記している。《大洪水は、山々の頂上を覆ったが、今日我々が見るような平行層が支配的な山々を作ることはできなかった。大水と共に有殻類が来、その新しい地面で繁殖し滅びていった。しかし水が引くと地面にはその死体と貝殻が残ったことだろうし、現在目にするように20、30いやそれ以上の厚さを持ったことだろう。貝類が科ごとに水平に集積し、その内部もそれを覆う貝殻質で充満することになる。まして時には大理石層の間に30ピエの厚さを持つことになる。こうしたことからわが国のトルビア師を始め大洪水に原因を求める論者の見解

は完膚なきまでに叩かれることになる。反対側の山々の一様な高さ、同じ方向に向く山系、傾斜、今日に見る谷の多くはいずれも、海流が今日バレンシア王国で見るとような凹凸を形成する主要な要因として入り込んできたことを示している》 [1-1. pp. 75-76]。確かに聖書にあるように、世界を大洪水が襲ったとしよう。それが静寂であるならともかく、激しい勢いを見せたのなら、地層が水平に厚く積もるはずはない。それがトルビア師への否定につながっている。

先にあげた浸食はマクロな動きとすれば、もっと微小な世界においても浸食それと堆積が行なわれていることに注目している。そこで彼は石灰岩からなるカルスト地形にも注目している。ミリャーレスに近郊にあるコバ・ダ・レ・ドナスである。

《私が次の三つを理解した。一つは、側壁と丸天井は多くの凹凸や突出部があり、碎かれ部分的に破壊された岩のなれの果てであること。しかも周囲はとても細かく柔らかい石灰の粉に覆われていたこと。二つ目は、丸天井には幾つかの半球状の穴があり、そこには無数のコウモリが生息しており、互いに掴まり合ってまるで3ないし4ピエの葡萄の房のようだったこと。三番目として、丸天井からはたくさんの鍾乳石言い換えると逆さの円錐が垂れ下がっており、その先端からは水が垂れ、幾度となく地表にはかなりの大きさの池ができていて》 [1-2. p. 22]。

バレンシアの米作に関する問題

バレンシアの米作地帯では、しばしば三日熱の発症が観察された。地中海地域の湿地帯に見られたマラリアである。経済的利益を重視して米作を続けるか、逆に公衆の健康を重視して米作を止めるのが争点になっていた。そこで、かねてから関心を持っていたカバニーレスは1793年のバレンシア調査旅行第一回の際、米作が行われている地域、具体的にはアルプフェラ川近郊の耕地とフカル川の川床とを巡回し、川や灌漑水路を視察し、同年二回目の旅行では、1769年以来米作が禁止されている地域を視察したのである。この調査が円滑に行なえたのも、ロマナ侯の兄弟でモイシェンにある一族の所領の管理を行なっているバスクアル・カーロの惜しみない協力のおかげであり、とりわけバレンシア総監を勤めたクリオン公の起草した報告書の抜粋やその他の情報を提供してくれたのだった [4-2. pp. 93-95]。こうして1795年王立マドリッド医学アカデミーで『バレンシア王国における米の栽培ならびにそれが公衆の健康にもたらす影響』を発表し、稲作反対の立場を鮮明にした。これは後にマドリッド王立医学アカデミーの覚書第一巻（1797年）に収録

された。

では、『バレンシア王国における米の栽培ならびにそれが公衆の健康にもたらす影響』の主張をかいつまんでおこう。まず、その章立てを挙げておく。すなわち、

〈はじめに；第一章：米が栽培される土壌の物理的記述；第二章：稲作ならびにそれがもたらす利益について；第三章：稲作がもたらす疾病，死亡ならびに人口減少；第四章：フカル河流域の耕地と，1799年（ママ。1769年の誤り）までは米作が行なわれたが以後今日まで禁止されているトゥリア河流域の耕地との比較；第五章：米が費消する多くの水は，農業に悪影響を与え，バレンシア王国から収穫物，富ならびに人口を殺いでいる〉 [1-3. p. 48]。

第一章では土質が検討されている。確かに稲作が行なわれているところは，泥質である。本来的に泥質で耕地は稲作にふさわしいとみる。問題なのはかつて灌漑水路を引きながら，その管理不備により灌漑水が滞留して泥地になった場所である。ここにおいてこそ，当地の気候も相俟って夏には虫が発生し，腐敗した水が瘴気をもたらすのである。だからこそ乾燥した畑地に転換すべきと，この章を，米のもたらす効用よりは人々の健康と生活こそ重要だ，と締めくくっている [1-3. pp. 45-51]。

第二章では米の種類に言及したあと，稲作が重労働であり，もし本質的に泥地である田で稲作が行なわれ，福利が十分なら農業者の労働は賞賛に値するだろうが，現実にはそうではないと指摘している。第三章では，統計を用い，稲作が行なわれている地域とそうでない地域との人口増減比較（1730年から87年まで）を行なっている。1730年段階でほぼ同じ人口水準であったのが，対象の57年間で前者よりも後者の非稲作地域のほうが15739人の増加であることを算出している。そこで第四章では，依然稲作を続けるフカル川流域と1769年に稲作を禁止したトゥリア川流域との人口増減比較を行ない，何れもが人口増になっていることを示している。二つの流域の土質が違うのではないかという反論に対しても，どちらも本質的には泥地ではないので，畑作に転換するのが好ましいと見ている。第五章では，稲作が水を大量に使用することを示している [1-3. pp. 51-66]。最後の第六章では，彼の主張を四か条に纏めている。すなわち，

〈1) 米作は公衆の健康に甚だ禍をもたらす。従って，即座に禁止すべきであり，人類は一刻も早くその判断が明らかにされることを願う。2) 米は他の作物が得られる

耕作地よりも、遥かに多くの水を費消する。そして、このことに加え、本来泥地ではない耕作地での米の収穫は、耕作者に対して最も大きな収穫をもたらすわけではない。米作が家畜経済にもたらす悪影響をよりすぐに除くためにこうした性格を持つ耕作地での耕作を止めるべきだ。3) 本来的に沼沢地であるような土地があるが、その状態は水に流れを与えて腐敗するような植物の生育を妨げることで改良される。米は動く水と草のない土壌を必要とする。それゆえ、経験と地域的な状況が不都合を示さない限り、米作は本来的に沼沢地である場所においては好都合である。4) 米作は健康に悪影響を与える。それゆえ、本来的に沼沢地であるような場所でも集落の近くなら許されるべきではない》 [1-3. pp. 66-67]。

カバニーリエスの主張に対しては、稲作支持派である、旧バレンシア王国カステリオン出身のビセンテ・イグナシオ・フランコにより反駁の書が1797年に公刊された。その一年後、『ビセンテ・イグナシオ・フランコ博士の反駁に応答する、バレンシア王国における米作とそれが公衆の健康に及ぼす影響とに関する観察録への補足』を著してカバニーリエスは再度反論を行っている。そこではまず、泥地が多く水が滞留する水田は、暑く湿った瘴気をもたらすので健康に良くないと述べる。その際、ヒポクラテスはもちろん、18世紀のツィンメルマンの著作やアンドレス・ピケルによるメキシコシティの不健康を論じた著作、それに清帝国の広東地方の水田地帯に間歇熱が発生するというデンマーク人医師の報告を論拠にしている。さらにフランコ側の数値の恣意性を暴き、ハイメ征服王により灌漑水路が設けられる以前は、水田は泥地でなかったという歴史的考察も加味して相手の論を封じているのである [1-4. pp. 69-85]。

以上、植物学を環境問題に応用して公衆の健康という観点から彼は米作に反対する立場を明確にしたことがわかる。

4. まとめ

カバニーリエスという植物学者に関して判明したことや可能性は次のとおりである。

百科全書方法編に収録された“スペイン”の項目に対するフランス側の偏見に抗議の声を挙げた人物であったこと。ただしその姿勢は、伝統的スペインを単に擁護したとする、例えばメネンデス・ペラヨのような評価ではなく、むしろ18世紀の啓蒙主義がスペインで実りをあげつつあることに対するフランス側の認識不足を難じたことに本義がある。換

言すると、彼も啓蒙主義知識人の一人出会って頑迷固陋の代表者ではなかったということだ。おそらく、同時期にフランスを難じたパブロ・フォルネルについても同様なことが当てはまるかもしれない。

啓蒙時代の植物学も一枚岩ではなかったこと。王立植物園の前任者ゴメス・オルテガとは感情的にも学說的にも齟齬を重ねた。この人物がリンネの弟子を任じていたの対し、カバニーリエスはリンネを大いに尊敬しながらも、フランス流の植物学をも重視する柔軟な態度を取った。

彼はこれからというときに早世した。植物学研究から、フンボルトに見るような植物景観へ研究を移すことがあったか否かが興味ある出来事である。彼が植物園の園長として帝国各地の情報を収集できる立場にあったからその可能性なしとはしない。だが、景観研究はドイツ系の有機体論的な思考とは切り離せないのかもしれない。その代わり、米作反対の論陣を切ったように、衛生学や生態学的な方向に向かう可能性はあったと言えよう。

地質学の心得があったから、バレンシア王国の観察録でも山脈の形成を考察するなかで地球形成史考察の入口に立っている。大洪水説を修正し、もし水平な地層ならが静かな海洋で堆積が進行したことの証拠になること。堆積とセットなのが浸食であること。これは山地が必ずしも固定的な堅いものではないことを示している。同時に急激な変動を否定しているので、地球形成の時間を従来の説よりも長く取る考えに傾いた可能性のあること。さらにまた、大きな骨の化石などに彼が目じた場合、種の固定という考えは揺るぎ、動物同士に見る発生の時期のずれ、場所の複数性に思いを致した可能性のあること、などが挙げられよう。さらに考究を重ねるべき諸点でもある。

【参考文献】

- 1-1. Cavanilles, Antonio: *Observaciones sobre la historia natural, geografía, agricultura, población y frutos del Reyno de Valencia*, tomo primero, (Valencia: Albatros), 2002, 236pp.
- 1-2. Cavanilles, Antonio: *Observaciones sobre la historia natural, geografía, agricultura, población y frutos del Reyno de Valencia*, tomo segundo, (Valencia: Albatros), 2002, 236pp.
- 1-3. Cavanilles, Antonio: *Observaciones sobre el cultivo del arroz en el reino de Valencia y su influencia en la salud pública*, (Madrid: Imprenta Real), 1797, in Ministerio de sanidad y consumo(ed.): *La enfermedad infecciosa dede la Ilustración*, (Madrid: Ministerio de sanidad y consumo), 1988, pp.45-67.
- 1-4. Cavanilles, Antonio: *Suplemento a las observaciones sobre el cultivo del arroz en el reino de Valencia y su influencia en la salud pública en respuesta a la contestación de D.Vicente Ignacio Franco*, (Madrid: Imprenta Real), 1798, in Ministerio de sanidad y consumo(ed.): *La enfermedad infecciosa dede la*

- Ilustración*, (Madrid: Ministerio de sanidad y consumo), 1988, pp.69-85.
2. Jovellanos, Gaspar Melchor de: *Informe sobre la ley agraria; Memoria sobre espectáculos y diversiones públicas*, (Madrid: Cátedra), 1997, 437pp.
 3. Abellán, José Luis: *Historia crítica del pensamiento español*, vol.3, (Madrid: Espasa-Calpe), 1988, 918pp.
 - 4-1. González Bueno, Antonio: *Antonio José Cavanilles (1745-1804)*, (Madrid: Doce Calles), 2002, 459pp.
 - 4-2. González Bueno, *Tres botánicos de la ilustración*, (Cantoblanco: Nivola), 2002, 154pp.
 5. Guirao de Vierna, Ángel; Pino Díaz, Fermín: *Las expediciones ilustradas y el estado español*, in Fermín del Pino Díaz(coord.): *Ciencia y contexto histórico nacional en las expediciones ilustradas a América*, (Madrid: CSIC), 1988, pp. 19-69.
 6. Lynch, John: *Bourbon Spain: 1700-1808*, (Oxford: Basil Blackwell), 1989, xiv+450pp.
 7. Peset, José Luis; Lafuente, Antonio(eds.): *Carlos III y la ciencia de la Ilustración*, (Madrid: Alianza), 1988, 402pp.
 8. Sempere y Guarinos, Juan: *Ensayo de una biblioteca española de los mejores escritores del reinado de Carlos III*, tomo II, (Madrid: Gredos), 1969, 250pp.